報告区分 1

公営住宅標準設計 51C 型成立に至るまでの経緯

The Process of the Public Housing Standard Design 51C-Type's Establishment

○褚　秋霞[*1]，深井祐紘[*2]，花里俊廣[*3]
CHU Qiuxia , FUKAI Yoshihiro , HANAZATO Toshihiro

This study aims to clarify the process of the public housing standard design 51C-Type's establishment. Focused on the process of sketches, 11 floor plans were picked up which contain 9 sketches and 2 plans of standard design. Firstly, the characteristic of every sketch was organized. Then, the study extracted twelve characteristic features of the final plan from the designers' concept. The result reflected that the 51C-Type was completed through 6 sketches in about 2 months. And the differences between the final plan and the standard design were found in this study and only part of the final plan's characteristic features were incorporated into the standard design.

キーワード：公営住宅標準設計 51C 型，エスキス，プロセス
Keywords: The Public Housing Standard Design 51C-Type, Sketches, Process

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

公営住宅標準設計 51C 型（以下の「51C 型」）は戦後の日本の住宅にとって重要なものであるといわれ、51C 型に関する議論は、建築家や様々な分野の研究者らを巻き込んでなされてきた。例えば、建築史家の内田青藏[1)]は 51C 型が公共住宅の原型となった平面形式であると説明し、現代までその影響が残るとしている。また、建築家の山本理顕[2)]は「51C 型というのは、ひとつの住宅という箱の中だけの革命ではなく、同時に集合住宅という形式の発明とセットになっている」と述べるなど、社会のあり方を変革する発明であったとする。さらに、社会学者の上野千鶴子[3)]は「この nLDK の基本プランが完成したのは一九五一年、公団住宅の 51C 型でのことです」と述べ、51C 型の現代の nLDK プランへの影響を述べている。

そこで、本稿は、このように後世に大きな影響を与えた 51C 型がどのようにして生まれたのかを、51C 型の成立前夜の様子を紐解くことによって明らかにする。特に、吉武研究室でのエスキスプロセスに着目して、それが出来るまでの 1950 年 11 月から 12 月 26 日の 2 ケ月余りで描かれた図面類に着目してどういった形態的な特徴を有しているかを分析する。また、51C 型がどのような理念に基づいて設計されたかを述べ、51C 型の成立過程を明らかにする。

1-2 既往研究

51C 型に関する建築計画分野の既往研究を整理すると、主に、51C 型がどのように建設されたかや、51C 型の影響に関する研究などが挙げられる。例えば、菊地・小村ら[4)5)]は、福岡県内の団地の実測調査を通じ、実際に地方で作られた 51C 型は本来の標準設計とは異なると述べ、「地方は国の標準設計を鵜呑みにせず、独自の検討を加えていた」と指摘している。また、江上[6)]は 51C 型の理念、プランが戦後の住宅に非常に大きな影響を与えたと述べている。北川[7)]は DK の定義を「食事室と台所が一体となった椅子式の室」とし、「食寝分

*1　筑波大学大学院人間総合科学研究科　博士後期課程・修士（デザイン学）　Ph.D. Student, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, M. Design
*2　（株）プレイスメイキング研究所　研究員・博士（工学）　Researcher, Placemaking Institute Inc., Dr.Eng.
*3　筑波大学芸術系　教授・博士（工学）　Prof., Faculty of Art and Design, University of Tsukuba, Dr.Eng.

離論」と「公営住宅 51C 型」もまた、DK の成立過程において重要な役割を果たしたと述べている。

しかし、51C 型がどのようにして成立したのかということは吉武・鈴木らの著書[8)9)10)11)]の他は、一部の書籍[12)]にまとめられているのみであり、学術的に客観的なかたちで解明されてはいないため、本稿で整理する。

1-3 研究方法

研究対象となるのは平面図である。

『建築設計計画研究拾遺 II』[10)]と『五一 C 白書』[11)]には、吉武や鈴木らが設計したエスキス原図と文章などが残されている。この 2 つが最も網羅的であるが、相互に矛盾し、補充する内容もあり、精査したい。その他にも藤森[12)]がいくつかの図面を取り上げている。これらの資料は、吉武・鈴木らが提出した 51C 型の案をもとに、久米建築事務所が標準設計を作成したことが記載されている。また、8 の平面図があり、そこに記載された日付と作図者[注 1)]の名（吉武泰水は「吉武」、鈴木成文は「鈴木」、郭茂林は「郭」）を組み合わせて以下のように呼ぶこととする。[2/2 吉武・郭案]［8/10 鈴木案］［11/8 吉武案］［11/13 吉武･郭案］［11/15 吉武案］［11/20 吉武・郭案］［12/5 鈴木案］［ 最終案（吉武研究室が最終に提出した図面）］などである。また、久米建築事務所が描いた 2 図面を［12/20 久米案 ］と［ 実施案 ］と呼ぶこととする。

そこで､本稿では「国庫補助住宅設計構造審議会」（以下の「審議会」）に吉武・鈴木らが提出した［最終案］に至るまでの 8 平面図と、標準設計として採用された久米建築事務所が描いた［実施案］と 51C 型以前の 12 坪の標準設計を合わせて 3 平面図の合計 11 を取り上げ、記述と図面とを比較しながら、51C 型が生まれたエスキスプロセスにおける試行錯誤を明らかにし、計画上の理念から建築形態への翻訳作業の巧拙を確認し、吉武・鈴木らがどのような工夫をしたかを整理する。次の手続きにより行う。ア）51C 型の設計に関してどのような変更や追加があったか各案の特徴を述べつつ、整理する。イ）標準設計として採用された最終案の特徴を設計意図に基づいて定義をする。ウ）それをもとに全ての図面を比較してそれぞれの特徴を挙げ、51C 型成立までのプロセスを整理する。

2. 51C 型成立までの流れ（図 1[注 2)]）

2-1 当時の社会背景

当時、敗戦直後の住宅不足のため、国は 1946 年 5 月～ 1950 年 10 月の間に「臨時建築制限令」いわゆる坪

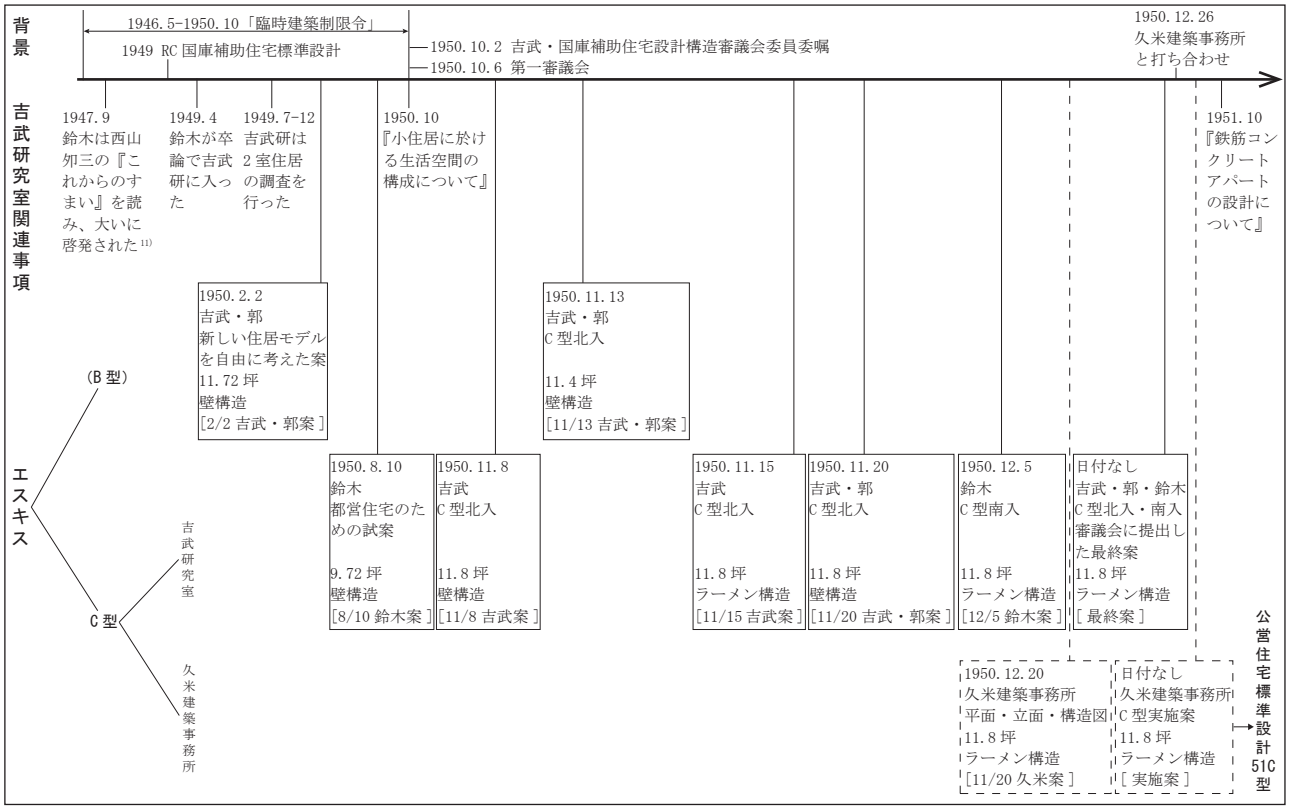
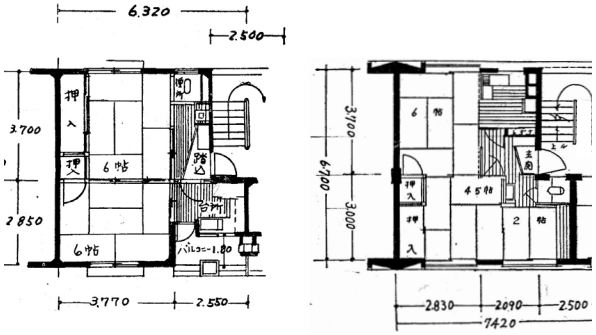


図 1　51C 型成立までの流れ[注 2)]

数制限令を出し、戸当たりの建設面積に12坪までという制限を設けた。一方、住宅復興は、食糧増産とともに政府の最緊急政策であり、同時に都市不燃化も強調された。しかし、当時RCアパートについては社会的にもほとんど経験がなかったため、中央で標準設計・標準仕様書を作り、各公共団地の状況に合わせて設計した。1949年にはA、B、Cの三つのタイプが標準設計として作られた。**図2**[13]は51C型と同じ12坪の公営住宅標準設計49B-N型と50B-N型を示す。



49B-N(12坪)　　50B-N(12坪)

図2　前51C型[13]

2-2 当時の吉武研究室

当時の吉武研究室には、助手として郭がおり、大学院生として鈴木がいた。

鈴木は1947年に大学に入学して、同年9月ごろ西山夘三の『これからのすまい』[14]という本を読んで住宅について新たに目を開かされ、この分野に興味を持つようになった。1949年4月に鈴木は卒論を吉武研究室で書くことになった。

西山夘三は1942年に「庶民の住宅では、寝る部屋と食べる部屋は分かれている。食事のためには二畳とか三畳という小さな部屋でも、それ専用の部屋（茶の間）を充てる生活が一般である。食・寝分離は基本的な住要求である」[注3]という食寝分離論を発表した。

吉武泰水・鈴木成文らはこの西山夘三の食寝分離論を読み、1949年7月～12月に2室住居の調査[15]を行い、当時の狭小住宅における平面と食寝の間のある法則性を発見していた。それは、主室食事型で就寝分解（家族が1寝室のみ就寝している状態から2室に分かれて就寝するようになること）が起こりやすいことと、副室食事型で食寝分離となりやすいことであった。それをもとに考えると、2室に加えて台所の近くに小さい食事室を設けることで、食寝分離と就寝分解が同時に進む、という「科学的」な研究成果として間取りを理解していたのである。

2-3 審議会前の提案

1949年に行った調査の結果に基づき、郭は、吉武の指導の下に1950年2月2日に新しい住居モデルの［2/2吉武・郭案］を作る。一方で鈴木は、当時都庁に就職して都営住宅の係に配属された元同級生の矢吹茂郎氏から求められて8月10日に都営住宅のための試案［8/10鈴木案］を作った。また、吉武は1950年10月には前述の調査結果[16]について日本建築学会で発表した。

1950年の秋に審議会が発足し、吉武は委員として参画した。委員委嘱は10月2日、第一回目の審議会は10月6日であった。すでに建設省はあらかじめ標準設計としてA型、B型、C型、MB型の4案を用意することと、それぞれの担当設計者（設計事務所）を決めていた。吉武は当時について、「筆者は委員として、当初（はじめての経験なので）様子を見ていたが、それまでの研究室での研究成果が適用される良いチャンスとみて、敢えて新しい案を提示することを決意し、11月始め頃から集中的にエスキスに取り組み…」[10]と述べており、11月から設計に取りかかったことがわかる。

2-4 審議会への提案

その後、吉武は鈴木に、以前に目にしていた［8/10鈴木案］の資料提供を求める。そのために、鈴木は都庁の矢吹の所に預けてあった図面を取りに行ったと述べている[11]。この［8/10鈴木案］をもとに［11/8吉武案］が作られ、審議会への最初の提案が行われた。

また、11月13日には以前に設計した［2/2吉武・郭案］の改善点を加味した案として［11/13吉武・郭案］が作られた。この案は、ちなみに、後にB型の規模に広くして作られ、B型として扱われた。

11月15日には、［11/8吉武案］の改善案として［11/15吉武案］が作られた。

11月20日に［11/20吉武・郭案］を設計し、同時に、A型とB型とともに審議会に提出した。その場でC案担当の久米建築事務所長久米権九郎氏から「この案を戴きたい」と挨拶があった[10]という。

それを受け、12月5日に南入の［12/5鈴木案］が作られた。

12月20日付けの久米建築事務所提出の平面、立面、構造図があるが、［11/20吉武・郭案］がそのまま使用されている[10]という。

審議会に［最終案］を提出した。ただし、この設計図には日付がない。しかし、12月26日に久米建築事務所と打ち合わせを行ったことが記録されており、吉

武はこの時点から吉武研究室の手を離れ、久米建築事務所に移ったと述べている[10]。

久米建築事務所の［実施案］がある。この平面図にも日付がないが、標準設計 51C 型になったものである。

3. 各図面の詳細の特徴

前述の研究成果をもとに、吉武・鈴木らの 51C 型には、極小の空間で食寝分離と就寝分解の両方を図る案として台所兼食事室が導入された。これは最小限規模の住宅に対応し、同時に新しい時代を象徴する生活像の提示でもあった。以下時系列に従い、設計図の特徴を詳細にみよう。この各案については鈴木成文が詳細な解説を『五一 C 白書』[11] に載せているので、それも貴重な資料と考えて、該当箇所を一部抜粋している。

3-1 2/2 吉武・郭案（図 3）[11]

1950 年 2 月 2 日に郭が吉武の指導の下に作った 11.72 坪の案である。この案をみると、壁構造の北入の案で、北側に 2 つの三畳の寝室を設け、寝室の間を共用の押入れで仕切っており、各寝室にタンスが付けられている。南側に居間食堂厨房を板の間で設け、洋風便所を設置している。寝室が狭いが、南側の居間食堂厨房は当時の集合住宅にとって先進的な提案であった。この案について鈴木は「調査による知見を踏まえつつ新しい住居モデルを自由に考えたものです」と述べている[11]。

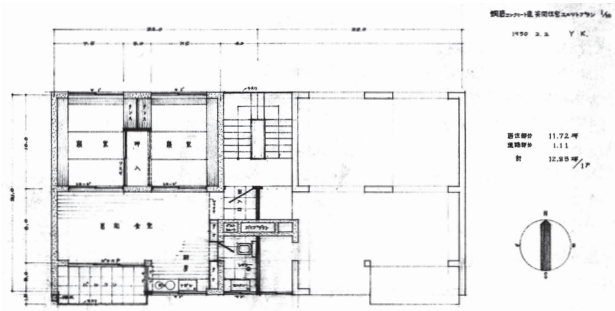


図 3　2/2 吉武・郭案[11]

3-2 8/10 鈴木案（図 4）[11]

1950 年 8 月 10 日に鈴木は、前述のとおり、都営住宅のための試案を作った。9.72 坪で、壁構造の北入の案である。4.5 畳の 2 寝室の間を壁で仕切るのはこの案のオリジナルな部分である。2 寝室には「30cm 上り」が表現され、全体的に出窓が設けられている。鈴木はこの案は台所を広めにとって食事もできるようにと意図し、「食寝分離」と「寝室分解」の両立を意図した苦心の作であり、畳敷きの二つの居室の間に壁を設けて両室を隔離したことはもう一つの大きな提案と述べている[11]。

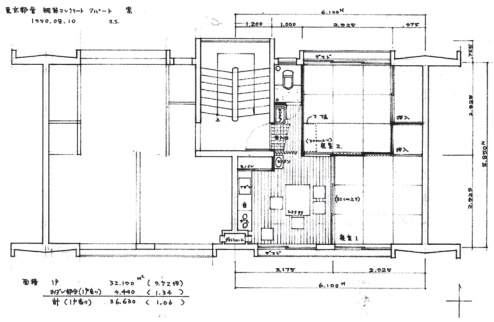


図 4　8/10 鈴木案[11]

3-3 11/8 吉武案（図 5）[11]

1950 年に 11 月 8 日に吉武が作成した案は［8/10 鈴木案］を参考にして設計されたと考えられる。審議会に提案した最初の案であり、面積が 11.8 坪で、寝室は南北にあり、台所は南にあり、壁構造の北入の案である。吉武[10] と鈴木[11] がこの案について他の案より最も多い内容を述べていることから、この案の重要性が理解される。

この案をみると、［8/10 鈴木案］と同じ居室構成であるが、寝室は 6 畳と 4.5 畳に変更され、寝室の段差の表現が取り外れ、物置、バルコニー、洋風便所が設けられている。鈴木はサービスヤード的なものとして扱われるバルコニーと身近に設けられる物置は当時の生活を反映するものであり、洋風便所は吉武自身の生活体験から出た要求で主張されたと述べている[11]。また、バルコニーについて吉武は屋内とほぼ同じレベルで設け、半分内部のようで、後の［11/15 吉武案］のバルコニーより出入りしやすく、幅も広いから日常的利用に対して使い易いと思われると述べている[10]。また、2 寝室にそれぞれ「(夫婦)」「(子女)」、北側の寝室と食室厨房の間「居室」と書いてあり、設計者の住み方の想定が読み取れる。ただ、寝室の境壁に「- - - →」の記号が記されており、［8/10 鈴木案］に「居室の間に壁を設けて両室を隔離したこと」

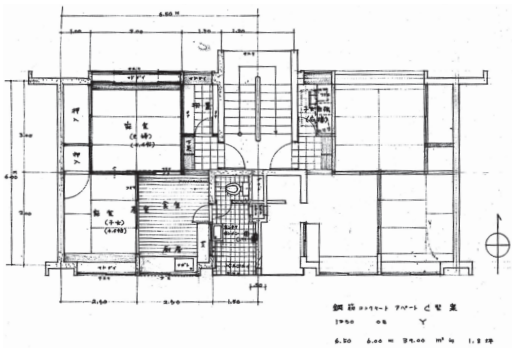


図 5　11/8 吉武案[11]

の提案が採用されなかったことがわかった。この内容について吉武は「これはここを壁で仕切ることに対して、ふすまとして続き間構成とするか？或いはなんらかの方法で通風をはかるか？といった迷いが残っていたことの現れであろう」と述べている[10]。

3-4 11/13 吉武・郭案（図 6）[11]

1950 年 11 月 13 日に吉武、郭が［2/2 吉武・郭案］の改善案として作った 11.4 坪の壁構造の C 型北入の案である。南に食事居間炊事仕事の板の間が設けられ、「(応接)」も書かれている。寝室は北側にあり、3 畳から 4.5 畳に広げられ、寝室の間が壁で仕切られている。この案について鈴木は居室が三畳の規模が公営住宅として不適切であろうとの判断から、その改善案として 4.5 畳にしたと述べている[11]。この案は後に B 型の規模に広くして作られ、B 型として扱われた。

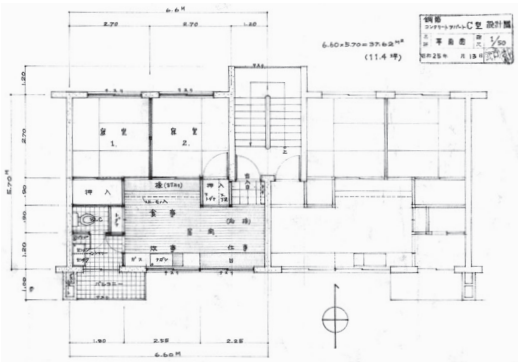


図 6　11/13 吉武・郭案[11]

3-5 11/15 吉武案（図 7）[11]

1950 年 11 月 15 日に吉武が設計した 11.8 坪のラーメン構造の案である。［11/8 吉武案］の改善案であり、C 型北入であり、寝室は南北にある。［11/8 吉武案］と比較すると、まず、バルコニーの変更が大きく、半分内部で洗濯専用の空間として使われていたものを室外のバルコニーに変更された。また、食事厨房の幅が 2.5m から 2.75m に広くされ、便所と洗濯空間の幅が 1.5m から 1.25m に狭められた。この案から出窓が使われなくなる。

鈴木はこの案に対して、「細かい配慮ですが台所と南居室の間の襖を工夫して、より広く両者を開放的に繋げる考慮をしています。これは当初意図した『家族全員がくつろげる部分』という空間を大事にしようとの苦心の表れでしょう。」[11] と述べている。

また、構造について鈴木は、委員会の構造部会の委員であった武藤清の主張で、壁構造は本格的な建築ではない、鉄筋コンクリート構造はラーメン構造であるべきだとの意見に従ったものだったと述べている[11]。

3-6 11/20 吉武・郭案（図 8）[11]

1950 年 11 月 20 日に吉武、郭が作った 11.8 坪の北入の案である。間取りは［11/15 吉武案］とほぼ同じであるが、構造が異なっている。［11/15 吉武案］は単独の設計のラーメン構造であるが、［11/20 吉武・郭案］は A 型、B 型も加えた 3 案となっており、壁構造である。

これを審議会に提出し、C 型を担当する久米建築事務所長久米権九郎から「この案を戴きたい」と挨拶があった[10]。吉武はその後のことを、1950 年 12 月 20 日付けの久米建築事務所提出の図面には立面、構造図は新たに加えられたが、［11/20 吉武・郭案］の平面図がそのまま使用されていると述べている[10]。しかし、久

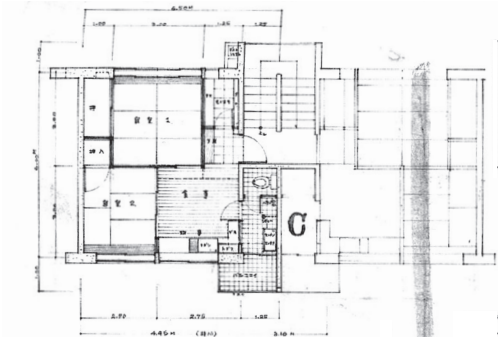


図 8　11/20 吉武・郭案[11]

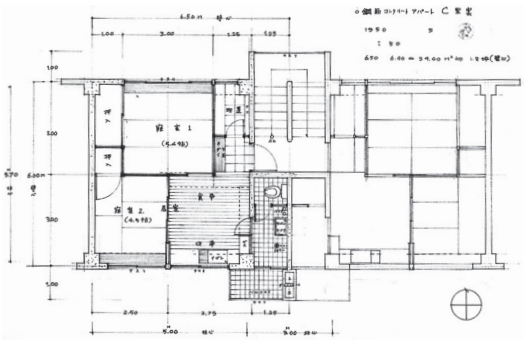


図 7　11/15 吉武案[11]

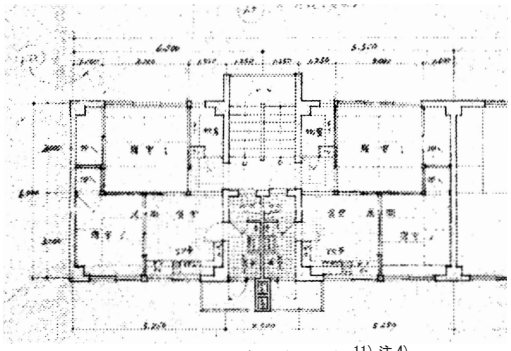


図 9　12/20 久米案[11] 注 4)

米建築事務所の平面図［12/20 久米案］（**図 9**）[11) 注 4)] をみると、壁構造ではないため、この平面図は実際には［11/15 吉武案］が使われたと思われる。

3-7 12/5 鈴木案（図 10）[11)]

1950 年 12 月 5 日に鈴木が作った初めてのＣ型南入のラーメン構造の 11.8 坪の案である。鈴木はこの案のサービスバルコニーがうまく設けられず、不本意なプランに終わっていると述べている[11)]。また、北側居室と玄関の境は委員会で「壁では葬式の際にお棺が出ないという指摘を受けた」ため、襖に変更したと述べている[11)]。この案を作る理由について鈴木は「配置計画上で南入りの棟も必要ですから、Ｃ型の南階段のプランも設計しました」と述べている[11)]。［11/20 吉武・郭案］の段階で審議会においてＣ型の基本図面が決まったため、南入案も必要になり、設計されたことが推測される。

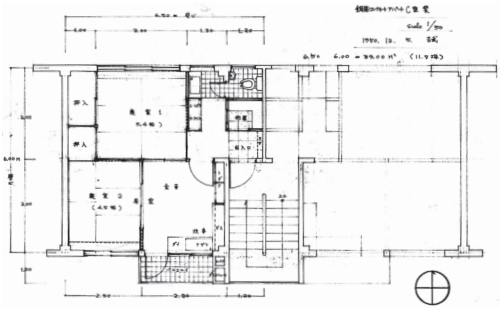


図 10　12/5 鈴木案[11)]

3-8 最終案（図 11）[11)]

吉武、郭、鈴木が審議会に提出した最終案である。ラーメン構造である。前段階と比較すると、寸法が若干異なっていることがみられる。南の寝室の幅は 2.5m から 2.8m に広げられている。食事炊事について、南入の案は 2.8m から 2.5m に狭められ、北入の案は 2.75m から 2.5m に狭められている。北入案の階段室の幅は 1.25m から 1.2m に狭められている。

鈴木はこの案はいちばん力を入れて設計したものだと述べている[11)]。また、居室の広さを確保すべきだとの審議会での意見を受け、南居室の寸法を広くし、台所の幅を狭める変更にしたと述べている[11)]。バルコニーについて鈴木は「入り込みバルコニーは南面の突き出しバルコニーと繋げてサービスヤード的なものと捉えているのですが、南入り型ではそれが設けられず不満が残りました。」と述べている[11)]。

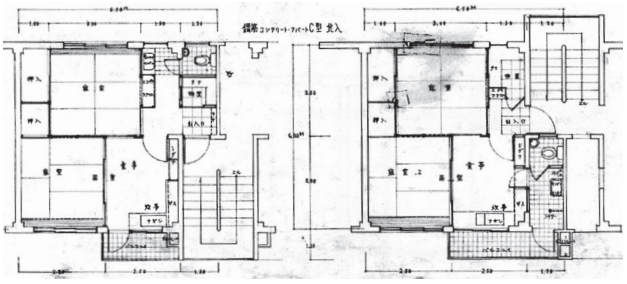


図 11　最終案[11)]

3-9 最終案後

吉武のもとには 1950 年 12 月 26 日に久米建築事務所と打ち合わせを行ったという記録が残っている。ただし、その他の詳細的な記録はない。このように、吉武はこの時点から吉武研究室の手を離れ、久米建築事務所に移ったと考えられるという[10)]。［最終案］は 12 月 26 日の少し前に作られたと推測できる。

4. ［最終案］の特徴

1951 年 10 月に吉武・郭・鈴木はＣ型に関する設計意図について日本建築学会に『鉄筋コンクリートアパートの設計について』[17)] を発表している。これに基

設計意図[17)]	主な項目
「51 年度国庫補助住宅鉄筋コンクリートアパートのうちＣ型の基本設計は……以下鉄筋コンクリートアパートに対する居住者の基本的要求として我々の取り上げたものを列挙する。これは一応**Ｃ型を対象としている**が、その意味は、Ｃ型のような小規模のものでも、凡そアパートとして具備すべき条件と云うほどの意味である。又それは我々の希望的仮定や憶測ではなく都市小住居の住生活調査のうちに居住者の要求の動向として存在し、且つかなりな量を占めて東ていると認められるものでなければならない。	①面積は 12 坪である。
１．普通の家族構成では（居住期間と考え合わせると）、少なくとも２寝室必要でＣ型でも**２寝室とるべき**であろう。	②2 寝室がある。
寝室の大きさは 4.5～6 帖程度がよく、3 帖はせますぎ、8 帖以上はこの程度の小住宅には広すぎる（たたみ敷を前提）。	③寝室は 4.5～6 畳程度である。
２つの寝室の１つは基本寝室（夫婦寝室）として、はじめから設計することが望ましく、両者の隔離、ことに基本寝室の privacy に注意したい。（夏の通風、W.C 出入口えの通路等にもこの考慮が必要である。）	④寝室は全て和室である。
寝室はこの程度の小住宅ではたたみ敷とすべきであろう。	
寝室には必ず押入を設ける。寝室は必ず南面させる必要はない。	⑤寝室には必ず押入を設ける。
２．これまでの住宅は結局１定的で、間仕切も不完全である。家族の数や構成によって居住部分の区分の要求は異るが、**子女のある家族ではく少くも家族全員がくつろげるほどの広さをもつ部分**とこの部分から相当隔離され勉強、読書、仕事（家事を含む）等が出来る部分を持つことが必要であろう。	⑥寝室と台所兼食事室を一体的な居室として利用しここを南面させる。
後者はさほど広くなくてもよいが**基本寝室と一致させ壁で仕切ってもよい**のではあるまいか。前者には**居住者の家族構成や生活の仕方に応じた住み方の出来るゆとりがほしい。尚この部分は南面させ、台所と直結、或は調理部分を含み、出入口や便所につながるよう配置したい。**	
３．食寝分離は小住居では就寝分離を犠牲にすることになり易い。**少くも朝食の分離が出来るよう台所を広めにとることがよい**と思われる。	⑦2 つの寝室は壁で仕切られる。
Living kitchen 式の快適な整頓された台所は殆んどとれない（維持出来ない）が、下記**物置**や**サービスヤード的なバルコニイ**を設けられ、ば可能となるのではあるまいか。（古びんやつけもの等の収納、魚を焼く場所等として）	⑧台所兼食事室がある。
４．コンクリートアパートでは住居が庭や地面から切りはなされる。表庭はなくとも**裏庭即サービスヤード的な部分をバルコニーとしてとるべきであろう**。（物干場、一寸した物置場、野菜の洗場、魚を焼く場所等として）	⑨サービスヤード的なバルコニーがある。
バルコニーは又子供の遊び庭となるであろう。更に床に水の流せる場所として、行水や大物の洗濯場所としても充てられる。（夏の行水は我国では不可欠の生活習慣である）	⑩物置がある。
又階段は共通部分として通勤通学者よりむしろ主婦や幼児にとって重要で、南面を原則としてよいのではあるまいか。	⑪階段室は南面が理想である。
又アパートでは物置を別棟にとったり、地下にとったりしても著しく利用率が悪ろく、**多少容積は小さくとも手近に充分空間利用をはかった物置をとることが屋内を整頓するために必要であろう。**	
５注3)．**便所は洋風便器を備付けたい。**（清潔、子供の用便、トラブの仕末、面積等の点で）……」	⑫洋風便所がある。

図 12　設計意図によるまとめられた最終案の特徴

づき、［最終案］の特徴をまとめると、以下の①～⑫が挙げられる（**図 12**）。

①「面積 12 坪」
②「2 寝室住戸」
③「寝室は 4.5 ～ 6 畳程度」
④「寝室は全て和室」
⑤「一寝室一押入れ」
⑥「寝室と台所兼食事室の一体的利用と南面」
⑦「寝室間を壁で仕切る」
⑧「台所兼食事室」
⑨「サービスヤード的バルコニー」
⑩「物置」
⑪「南面の階段室」
⑫「洋風便所」

5. 久米建築事務所による［実施案］（図 13）

前述のとおり、51C 型の設計は 1950 年末には吉武研究室の手を離れ、久米建築事務所に移った。久米建築事務所設計の［実施案］平面図[11]（**図 13**）が存在する。この平面図には日付がない。この［実施案］は公営住宅標準設計 51C 型として採用された。吉武が「1951.3 提出前に審議会で配布されたものと思われる」[10] と述べているので、1950 年 12 月 26 日の打ち合わせから 1951 年 3 月の間に作られたと推測できる。この平面図は最終案（**図 11**）と比較すると異なる点があり、吉武はそれらの点について、「その後、51C 型の実施設計図面をみて、第一に感じたことは、バルコニーの扱いの違いであった。筆者はサービスバルコニーを意図していたので、住戸とほぼ同じレベルと考えていたが実施では庇として扱い、住戸レベルからはかなり下がった使いにくいものになっている。また便器を洋式でなく当時のいわゆる『汽車式』にしたため床の段差やトラップの扱いでかなり面積が広くなっている」[10] と評価し、バルコニーと便所の扱いの上で自らの原案との違いがあることを指摘している。その他、6 畳、4.5 畳寝室の窓が出窓に変更されていることが確認できる。

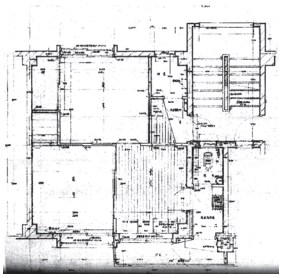


図 13　実施案[11]

6. 考察

6-1 図面の比較（表 1）

以上で取り上げた 11 図面（［12/10 久米案］は［11/15 吉武案］とほぼ同じであるため、ここで議論しない）を最終案の①～⑫の特徴をもとに**表 1** にまとめる。

それぞれを評価するために、①～⑫の各特徴で個別の特徴を満たすものは○とし、満たさないものは×とする。

また、51C 型以前の標準設計、吉武研究室が作成したエスキス、標準設計 51C 型のそれぞれの特徴の点数を比較するため、「前 51C 型」「吉武研究室エスキス」「実施案」の三つに分ける。

全体の○の数からみると、5 ～ 12 に分布していることがわかる。○の数が最も多いのは［12/5 鈴木案］と［最終案］であり、全ての特徴を有する。「前 51C 型」は 5 と 6 であり、「実施案」は 10 であり、「吉武研究室エスキス」は 6 ～ 12 に分布している。○の数が多いエスキス図面をみると、［11/8 吉武案］は 10、［11/15 吉武案］と［11/20 吉武・郭案］は 11、［12/5 鈴木案］と［最終案］は 12 の特徴を全て持ち、これらは設計段階において重要な役割を果たしていると考えられる。また、［実施案］は 10 の特徴を有し、⑪⑫は満たさないことから［最終案］は理想として示されたが、実際に作る時には、実施できない点が多く、以上のような特徴を含まないことがわかった。

一方、［吉武研究室エスキス］8 案のうちに、［2/2 吉武・郭案］と［11/13 吉武・郭案］はB型として扱われたため、吉武らは残した 6 案で 51C 型を完成したといえる。

表 1　平面型の比較

		①～⑫特徴												n/12*
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	
前 51C 型	標準設計 49B-N	○	○	○	○	○	×	×	×	○	×	×	×	6
	標準設計 50B-N	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	5
吉武研究室エスキス	2/2 吉武・郭案	○	○	×	○	○	×	○	○	○	×	×	○	8
	8/10 鈴木案	×	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×	6
	11/8 吉武案	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	10
	11/13 吉武・郭案	×	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	○	8
	11/15 吉武案	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	11
	11/20 吉武・郭案	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	11
	12/5 鈴木案	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
	最終案	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
実施案		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	10

＊○:1, ×:0

6-2 51C 型の設計者は誰か

多くの文献で、51C 型は吉武研究室また吉武・鈴木・郭三人に作られたと述べられているが、実際に誰が 51C 型を設計したかははっきり示されていない。

51C 型に関するエスキスプロセスをみると、［8/10 鈴木案］、［11/8 吉武案］、［11/15 吉武案］、［12/5 鈴木案］がそれらの候補となることがわかる。それらについて①～⑫がいつ出現したかを示す（**表 2**）。

表 2　各エスキス案の特徴

エスキス	新たに加わった特徴	満たす特徴
前 51C 型 （49B、50B）	①面積 12 坪 ②2 寝室住戸 ③寝室は 4.5～6 畳 ④寝室は全て和室 ⑤一寝室一押入れ	①②③④⑤
[8/10 鈴木案]	⑦寝室間を壁で仕切る ⑧台所兼食事室	ⓧ②③④⑤ⓧ⑦⑧ⓧⓧⓧⓧ
[11/8 吉武案]	⑥寝室と台所兼食事室の一体的利用と南面 ⑨サービスヤード的バルコニー ⑩物置 ⑫洋風便所	①②③④⑤⑥ⓧ⑧⑨⑩ⓧ⑫
[11/15 吉武案]	⑦寝室間を壁で仕切る	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩ⓧ⑫
[12/5 鈴木案]	⑪南面の階段室	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫

前 51C 型（49B、50B）が共通に持つ特徴は①②③④⑤である。

[8/10 鈴木案] について、鈴木は⑦⑧を提案した。

[11/8 吉武案] について、吉武は⑥⑨⑩⑫を提案した。

[11/15 吉武案] は⑦を満たし、○の数が 11 になった。

[12/5 鈴木案] は⑪を満たし、○の数が 12 になった。

以上のように、①～⑫の特徴は鈴木と吉武という両者の提案の組み合わせといえる。つまり、図面の特徴の上からも 51C 型は鈴木と吉武が共同で設計したものと考えられる。

7. 結論

結論として、以下の知見が得られた。

・1950 年に開かれた審議会で久米事務所は吉武研究室が提案した C 案をほぼそのままで採用した。久米事務所は吉武研究室が作成した最終案の図面をもとにして標準設計 51C 型の実施案を描いた。後二者には若干の相違点がみられる。

・吉武研究室（吉武・郭・鈴木の 3 者から成ると推定される）は 2 ケ月余りの短時間に 6 案のエスキスを作成し、51C 型の最終案を完成させた。本稿では、各案の図面と解説により、エスキスプロセスにおける設計者らの試行錯誤を明らかにした。

・吉武らがまとめた設計意図に基づき最終案の特徴を 12 点にまとめたものが図 12 である。それぞれの図面の特徴をみると、[11/8 吉武案]、[11/15 吉武案]、[11/20 吉武・郭案]、[12/5 鈴木案] の 4 案が 51C 型の設計段階において重要な役割を果たしていると考えられる。また、12 点の特徴を全て満たすものは理想としてしか存在しないもので、実際に標準設計には取り入れられなかった。

注

注1)エスキスの作図者について、基本的文献10と文献11に載せたエスキス原図に記録した作図者の名のローマ字（Y：吉武、K：郭、S.S：鈴木）、押印またサインで判断する。ただ、12月5日のエスキス原図に「吉武」と書いているが、文献10のp86と文献11のp112の文章に実際に鈴木が作った図面と記載しているので[12/5鈴木案]と呼ぶことにする。また、最終案のエスキス原図に作図者は書いていないが、文献11のp138の文章に吉武・郭・鈴木が作ったと書いているので、三人で作ったと判断した。

注2)文献10と文献11をもとに作った。

注3)ここは鈴木成文が文献8のP22で西山夘三の「食寝分離論」を解釈した内容である。

注4)［12/20久米案］は文献11に小さな図面がしかなく、画像の解像度も高くない。3-6では、構造に注目するため、壁構造ではないことが認識できることが重要と考え、この図面を利用することにした。しかし、この図面の間取りの特徴を判別しにくいため、図面の特徴の比較について議論しない。

注5)文献17の原文では項目番号「4」から直接「6」に飛ばしたが、文献10では同じ内容を再整理した文章を「5」に直したため、ここで「5」に直した。

参考文献

1)内田青藏：ダイニングキッチン（DK）誕生前史ーわが国戦前期の住宅にみられる台所と食事の場の一体化の過程に関する一考察，台所の100年，日本生活学会編，ドメス出版，pp.215-239，1999.11

2)山本理顕：鉄の扉で閉じない住宅の可能性，新建築2001年1月号，pp.100-103，新建築社，2001.1

3)上野千鶴子：家族を容れるハコ　家族を超えるハコ，平凡社，2002.11

4)菊地成朋，山口謙太郎，柴田建，田島喜美恵：51Cの地方都市における展開-福岡県住宅協会が建設した51C型住宅-，住宅総合研究財団研究所報，№36，pp.189-200，2009

5)小村悠介，菊地成朋，柴田建，新崎朝規：福岡県住宅協会が建設した51C型住宅-今川橋団地の実測調査から-，日本建築学会九州支部研究報告，48号，pp.237-240，2009.3

6)江上徹：nLDK批判をめぐる諸理念・諸議論の系統的整理：前編　ー計画学のための基礎的考察　その2ー，九州産業大学工学部研究報告 41，pp233-238，2004.12

7)北川圭子：公団住宅におけるダイニング・キッチン成立過程に関する研究 -「55-4N-2DK」の空間モデルについての考察-，日本建築学会計画系論文集，600号，pp.197-201，2006.2

8)鈴木成文：住まいの計画・住まいの文化，彰国社，1988.11

9)鈴木成文，上野千鶴子，山本理顕，他3名：「51C」家族を容れるハコの戦後と現在，平凡社，2004.10

10)吉武泰水：建築設計計画研究拾遺II-簡易版-，吉武泰水先生を偲ぶ会・世話人，2004.11

11)鈴木成文：五一C白書　私の建築計画学戦後史，住まいの図書館出版局，2006.12

12)藤森照信：昭和住宅物語　初期モダニズムからポストモダンまで23の住まいと建築家，新建築社，1990.3

13)規格住宅研究会：アパートの標準設計，住宅研究所，1959

14)西山夘三：これからのすまいー住様式の話ー，相模書房，1947.9

15)吉武泰水，鈴木成文：都市小住居における住い方-特に2室住居における就寝・食事について-，日本建築学会論文集，46号，pp.81-91，1953.3

16)吉武泰水、大坪昭、北沢勲、鈴木成文：小住居に於ける生活空間の構成について，№8，pp.290-293，1950.10

17)吉武泰水，郭茂林，鈴木成文：鉄筋コンクリート・アパートの設計について，日本建築学会関東支部研究報告，13号，pp322-325，1951.10

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP15H02281 の助成を受けるものです。